

# 成人の文化活動における形成の意味

張 智 恩\*

## The Consideration of the Development in the Cultural Activity of Adults

Jieun JANG

Recently, there are an increasing number of people who take part in various cultural activities for the enjoyment of hobby life in the Kominkan. The Kominkan is the representative adult education center in Japan. However, the research on the social education has concentrated on studying about the direction of the relationship between individual and society through cultural activity, instead of studying about the concrete factors that are useful to the development of humans at the small group of cultural activity.

On the basis of this recognition, this article investigates the possibility of development in small groups where people take part in cultural activities such as hobbies and personal health. And, this article suggests that the original factors or processes are useful in the development of individual during the cultural activities. Through my next article, I will propose the meaning of original interaction during the cultural activity groups.

In the previous propositions, the possibility of the development of the adult is revealed on the basis of the theory about the "Habitus" by Pierre Bourdieu. In addition, the general characteristics in the content of the cultural activity is revealed with the aid of theory from "Sign and Symbol" by S. K. Langer. The meaning of understanding the relationship between a new value or content of a cultural activity and the culture inside the individual as the result of past experiences is proposed for the continual development of participant in cultural activities.

### 目次

はじめに

#### I 文化活動における価値の問題

A 価値としての文化

B 価値中立的な文化

#### II 文化活動の活動としての特性

A 文化活動の定義

B 文化活動の実在的意義

#### III 文化活動の内容体系

A サインとシンボル

B シンボルの教育的意義

#### IV 個の形成における前文化活動段階の意味

A 治療的側面

B 形成的側面

おわりに

はじめに

戦後、公民館を中心として展開されてきた社会教育における学習内容としての文化は、国民の生活の変化に対応し、異なる様相と意味を帯びつつ、現れた。たとえば、戦後改革期から高度成長期の過程においては、生活に密着した課題解決型学習が活発に展開された。これに対して近年においては実生活の要求とは多少距離がある趣味型の学習が様々な芸術・文化・スポーツ活動を通じ、行なわれる。

1999年12月に総理府が施行した「生涯学習についての

\*生涯教育計画コース 博士課程3年

世論調査」のデータによれば、この1年間、生涯学習に参加したことがあると回答した人の比率は44.8%であり、学習及び活動の内容で見ると、「職業上必要なこと」と「家庭生活に役立つ機能」がそれぞれ9.4%と8.5%に過ぎない。もっとも多くの人々が学習している内容は「趣味的なもの」が22%でトップに立ち、続いて、「健康、スポーツ」についての順になっている<sup>1)</sup>。

一方、既存の社会教育における文化論はよく知られているように、碓井正久の文化創造主体論、佐藤一子の地域文化に基づいた文化協同のネットワーク論、北田耕也の表現と共感による美的連帯論等が取り上げられている。このような先行研究は文化をめぐる個と社会の関係の方向性を多角的に提示して多くの示唆を与えている。しかし、地域の公民館などで行なわれている小集団形態の文化活動は趣味や健康などの個人的な目的によって行なわれている場合が多く、特定の活動内における個人的な体験過程を通じ、文化の意味が問われている場合が多いため、そのオリジナルな過程を見ていく必要があるといえよう。

これまでの公民館における小集団活動は主に学習活動として捉えられ、共同学習論、相互学習論などが主な議論として提起された。このような学習論においては意識の変化及び課題解決に有用な方法や過程等が検討されてきた。しかし、現在、公民館利用者が経験する文化活動は課題解決とともに終わる完了的学習というより、多くの場合、学びを部分的に含んでいる趣味レベルの持続的な活動世界であるといわざるを得ない。そのため、社会教育研究における学習論はこのような文化活動を含んでより包括的に把握される必要があると考える。さらに個と社会の関係を提起する際、前提となる小集団活動に対しても個の形成の過程に焦点を当て、よりミクロな視点で検討を行なう必要があると言えよう。

この論考は抽象的、社会的レベルの文化ではなく、活動を通じた文化との出会いが個の形成において持つ意味を考察する。その際、「ハビトゥス」に関するピエール・ブルデューの議論と、芸術についての普遍的な内容体系を明らかにしたS・K、ランガーの議論を手がかりにする。以下においては、I章では、既存の社会教育研究における文化活動の理解について、特に文化が持つ価値の位置付け方を中心として検討する。続くII章では、ブルデューの「ハビトゥス」の概念を手がかりにしながら、文化活動の実在の意味を検討する。III章では、ランガーによるサインとシンボルの区別を中心に、文化活動の内容体系を整理する。最後のIV章では、文化活動が持つ個人における形成的意味を総括的に提起する。

## I 文化活動における価値の問題

### A 価値としての文化

社会教育研究において文化についての議論は多様である。それらの議論を土台にし、小集団をベースにし、個人的目的で行なわれる文化活動の視点から論を組み立ててみる。この場合、個人と社会における文化の意味と志向性を問う、いわゆる価値を踏まえた文化論と、価値を意識しないで楽しく生活化された活動の部分を区別することによって価値の側面と活動の側面が調和される文化活動の実体をより正確に把握できると考える。そのため、価値志向的なものと価値中立的なものに分け、文化の特徴を考えてみよう。

まず、文化と人格形成の関係をのべたものとして碓井正久の文化創造主体説がある。碓井は、人は社会の統制作用をうけることによってかれの行動様式の総体としての人格を形成するという前提で、社会の行動様式の総体としての文化に対し、人間の行動様式の総体を人格として区別する。そして適応の形式としての人格は社会統制作用が歪んだときには歪んだ形成を遂げることを避けられなくなることを指摘し、個人の主体的文化創造が必要であると説く<sup>2)</sup>。

碓井の議論は、社会構成員の行動様式に影響を与える社会における文化を批判的にとらえなおす個人の主体的文化創造を強調する。そしてそのような主体的文化創造により、心情と思考における歪みを修正するという治療的意味で文化を論じている。このように、碓井の議論は、文化が持つ価値を実際の文化活動に先立つ前提とするものだと言えるだろう。その結果、文化と関わる際にどのような要因と過程が人間の歪みの治療に寄与するかについての考察は、十分に具体的なものとは言えない。

碓井とは別に、文化を価値あるものとして区別し、規定しているのは宮坂広作である。宮坂の議論において文化は政治、経済を含んでいる広義の文化のうち、科学的真実、芸術的真実という人間的価値をもっとも集約的に表している狭義の文化、つまり、科学・芸術を意味する文化財として限定的にとらえられている。宮坂は教養を“文化という普遍的な価値にまで自己を形成しようとする営み”と語っている。そして、“文化の客観的価値を対象とする意図的な学習によって、文化を受容し、創造する過程でのパースナリティの形成ないし変革を構築するところに教育の独自の役わりをみとめるのであり、知性のなかにこそ人間性の中核を求めるのである”。と述べる<sup>3)</sup>。

碓井の議論においては社会における支配文化が個の形成に影響を及ぼすため、個人の主体的態度のもとで望ま

しい形成を構築していく過程と並立し、価値としての文化が理解された。反面、宮坂は個人の働きかけとは別に既に価値あるものとして存在する文化の内容を提起し、人間の形成において客観的価値としての文化との意識的出会いが重要であることを示唆する。ところで、宮坂が言う客観的価値としての文化は学習を通じた認識過程においても理解され得るが体験的過程を通じてより深く理解できるといえよう。美術であれ、音楽であれ、舞踊であれ、それぞれの文化は一種の美的価値に関わるものであるが、その美への認識はそのような文化が持つ独特な活動における秩序を理解し、その秩序を通過することによって得られるためである。

一方、価値としての文化は上記の論者以外にも個の文化と社会の文化における関係を社会的実状に基づいて提起したものとして佐藤一子論と北田耕也論が取り上げられる。

佐藤一子は、大衆消費社会における文化的消費の拡大に見られる問題を、“文化的要求に対する市場操作の強化によって(中略)文化的な生活における国民ひとりひとりの自立性、能動性、創造性を発揮する契機が失われ”という観点から論じる。そしてその結果、“文化的消費によらない文化的享受のあり方”が国民生活から排除されることを指摘する<sup>6)</sup>。このように、文化に関連して現れる問題を解決する糸口を、佐藤は、生活権の延長としての文化権に対する意識の高揚、心理的に強制された消費ではなく、文化的享受のために主体的に選び取られる「文化的消費」の実践、草の根の文化が活性化する地域文化の振興に見出している<sup>7)</sup>。

佐藤の見解は価値あるものとしての文化を実践のレベルで具体化し、「文化的消費」を実践的な視点で捉えなおしたことに意味があるといえよう。さらに個人における文化享受の喪失の要因と復権の課題を社会との関係で問い、社会に対し、文化的主体性を表現していく個の拡大として地域における文化的ネットワークの活性化を提起したことが意義深い。この場合、文化は鑑賞の対象、評価の準拠としての価値だけではなく、その価値を主張し、守り、反映する意識的な生活の営為によってよりリアリティを所有してくることを意味するといえよう。このような見解は価値あるものとしての文化を取り上げた議論の中でも実践としての文化論であると性格づけられる。このような見方は、北田耕也論にも見られる。

佐藤が文化を、多角的な生活のレベルで議論したことに対し、北田耕也は美の表現と共感という、芸術文化活動に焦点を当て、論じている。

北田は“形や色や音や、その他のさまざまなシムボルを創りだし”、“他者とのコミュニケーションをはかると

いう人間の行動様式”を“人間の第二の天性”と言う。そして、“表現は真実に迫る努力を通し、主体を鍛えると同時に、表現された真実によって人と人とをむすびつける”ことを指摘する<sup>8)</sup>。そしてこのような表現と共感を通し、美的共同が形成され、大衆文化に対する抵抗文化としてその共同が拡大・展開される過程を構造化する。このような表現の「個別性」と「共同」(連帯)との関係を山崎功は“個人の情念の美的昇化”が“他者への共感を呼び”、“美的共同を持つ”<sup>9)</sup>という。この連帯は“現実に一線を画す美的連帯の消極性”により、“現実主義的な地域の世俗的力関係を相対化し、それを批判する積極的な力に転化”し、変化を求める“内発的社会的力”となる構図である<sup>8)</sup>。

北田耕也の論は文化が持つ社会的機能とあり方を提起しているが、社会における問題と改善に直接、関与するより、美的価値に焦点化した限定的視点から社会を相対化している点の特徴である。そして美的価値が創出される芸術文化の表現過程の特性を生かしているため、文化論を文化活動の議論へ具体化していると考えられる。このような特徴は筆者がこの論考を通じ、提起している方向性と同じ脈絡に立つものであると考える。しかし北田耕也の議論が活動者に注目し、表現行為に焦点を当てていることに対し、筆者は文化活動が他の活動とは異なって持っている内容体系を明らかにした上で、その内容体系との関係において個の形成を検討したいと考える。特に個人が実践的主体として形成される過程が文化活動の内容体系と関連してどう現れるかを検討する。

小集団内における文化活動は社会的展開まで進む以前の段階において既に個の形成に寄与できる多くの有意義な側面を含んでいる。そのため、個の形成と関連し、文化活動の特性を研究することは公民館のような地域の文化活動の現場に有用な示唆を提供できると考える。その意味で価値に対する意識から少し離れ、個人に有益さを与える活動自体の意味が問われるべきであると考え。公民館などで文化活動をおこなっている多くの成人学習者は美学や文化論あるいは、それぞれの文化が持つ個と社会における価値についての理論的学習を行なうわけではなく、特定の活動にかかわり、活動の効果的遂行を通じ、文化的生活を楽しむためである。

## B 価値中立的な文化

一方、価値概念を排除した文化についての議論として、柳父立一の議論を取り上げることができる。柳父は個人的活動から得られる楽しみのため、自発的にそのような活動を深化させることを道楽として説明する。このような道楽は、課題の対象になる文化と区別され、人々の感

度によってその良さがわかるものであり、自己満足のために合理的・効率的範囲を越えて時間やお金をかける態度を伴う<sup>9)</sup>。

碓井や宮坂の議論における文化は価値あるものとして選別されたもの、あるいは主体形成に符合する特定の活動として捉えられ、価値が活動の成立を決定する。それに対して道楽においては活動の過程で生じる楽しさがあるからこそ活動の価値が創り出される。そのため、価値に対応する活動があるのではなく、活動の過程における楽しさを通じ、その意味及び価値が問われるのである。価値が活動の成立を決定しないという面で価値中立的であるといえよう。

柳父は道楽が人々に持続的な楽しさを与える原因を、活動における態度を通じて説明する。その際、“あるものに夢中になりすぎて他の役割を考慮できなくなると（中略）主体性を残らず、「極楽」になる”と指摘する。そして極楽に対する批判的視点で「道楽」は“境界領域でかろうじ踏みとどまり、他者に許容されているもので、かわいさがある”ことを述べる<sup>10)</sup>。柳父の言説は、好きな活動に傾け、楽しさを増進する活動にかかわる独特なルールを意味すると考えられる。道楽におけるそのルールは活動に没入しているながらも現実の要求によっていつでも活動が撤回できる没入と距離を想定した態度であるといえよう。

ところで、柳父の議論は道楽が成立する要因を主体側の態度においてのみ見出しているため、主体が活動を支配するパターンをとっている。しかし、実際に道楽がうまれるのは活動との関わりが効果的に進行しているからであり、活動の体系に対し、主体が働きかける過程において発生する有意義な関係性によるのである。

文化活動は、碓井及び宮坂が言う価値が理解される過程であると同時に道楽の楽しさが形成される過程でもある。これらの別の議論が並立することはその理念と楽しさが実在化される活動の内容と過程においてである。しかし、既存の社会教育研究においては活動の場における文化活動の内容体系と活動者の関係性の意味が十分に考察されてきたと言えない部分がある。文化との出会いが持つ個人的な意義についての議論は碓井の心情における自由及び、北田の表現を通じた意識化の議論においてすでに言及されている。それぞれの先行研究に対してこの論稿がもつ特色は、文化活動が持つ独特な内容体系を提起し、その内容体系に基づいた個の形成を考察するという点である。

## II 文化活動の活動としての特性

### A 文化活動の定義

文化活動を行なう成人学習者は趣味として行なう場合が殆どである。そのため、生活の維持に必要な不可欠であるというわけでもないが、10年以上も続く活動団体も少なくない。このような現状は人々が活動に対する純粋な興味を長期にわたって持続していることを意味する。

ところで、文化活動は活動に参加してきた時間的経過に沿って二つの段階を経ると考えられる。第一の段階は、活動の内容及び価値体系を体験的に学ぶ段階であり、「前文化活動」の段階といえる。続く第二の段階はある程度、活動の内容及び価値を理解・習得し、活動の中で自由を確保できる「主体的活動」の段階であるといえよう。

前文化活動の概念は品川清治が編著『文化と行動』の中で“芸術と行動”を論ずる中で取り上げた前芸術行動及び前文化行動の概念についての議論を参考し、説明できると思う。品川によると、前芸術行動は個人的な意味には本格的な芸術創出に寄与され得るある経験をあらかじめ、する芸術家の内的過程を意味するものとして戦争文学に対する戦争の体験などにあたるものである。さらに、社会的な意味には、社会的に認められるべき芸術的価値はないが社会の特定の集団やジブシイのような下層の流動集団に見られる芸術行動を意味する<sup>11)</sup>。同じく、前文化行動に対しても品川は、“文化のパターンを決定するようなあるいは文化の構成要素のパターンを決定するような個人又は集団の行動のパターンが考えられる”<sup>12)</sup>と言う。

上記の議論における前芸術行動及び前文化行動は、芸術及び文化行動そのものに至っていないが、その本質を潜在的に含み、形成している非定型的、未社会的な様々な芸術・文化行動を比喩したといえよう。その意味で、公民館などで行われる文化活動において個人が活動の総合的性格を構成する意味体系とスキルを理解していく過程を主体的文化活動に対比させ、「前文化活動」の段階として規定できる。本稿で前文化活動の概念に焦点を当てる理由は文化活動における参加者は、活動の内容体系を学習する過程なしで活動の享受が難しいためである。それとともに、活動における無知から漸次的な理解そして親和にいたる、いわゆる主体的文化活動の前段階は個人が経験し得る様々な有意義な側面を含んでいるためである。

地域のコーラス会、大人のためのピアノ集い、舞踊会、陶芸など多くの団体の活動が公民館で行なわれている。このような活動のグループは公民館の文化祭を通じ、作品を発表したり、あるいは地域の市規模の音楽連盟会が

主催する音楽祭を通じ、日ごろの活動の成果を演出したりする。しかし、日常的な活動における特性は、独特の機能的・価値的体系に定期的・連続的にかかわる体験的活動を根幹にしている点である。そして、誰にでも開かれた団体であるが、だれでも活動を享受できるとはいえない特性を持ち、比較的長い時間をともに過ごしてきた仲間の基盤がある。上記の議論を踏まえるとこのような団体の構成員の維持を基礎づける様々な要因のなかで、前文化活動の段階の通過が占める比重は小さくないであろうと考える。

この論文で提起する文化活動は個人が初心者として活動に関わりはじめ、比較的長い期間にわたり、前文化活動の段階を通じて、アマチュアとなる過程を意味する。このような文化活動は二つの特性により、その範囲を限定し、規定できると考える。一つは独立した活動の内容・価値体系が文化的に造られている特性であり、もう一つはその内容および価値体系に体験によって関わるといふ特性である。たとえば、スポーツ活動としてテニスをする場合、実際ラケットを持ち、テニスを持つ独特なスキルを学び、楽しむコートにおける活動が無いまま、テニスのルールや歴史を勉強するだけでスポーツ活動をするといわない。スポーツを勉強することはスポーツの活動様式ではないからである。このため、文化活動は連続的体験によって関わる文化的内容及び価値体系を持つ活動であると定義できる。このような活動は多様に存在するであろうが、この論文においては公民館で多く見られ、このような特性をより著しく持っている芸術文化活動を通じ、文化活動の意味を深めていきたいと思う。

## B 文化活動の実在的意義

ところで、個人はある価値的・機能的体系を持つ芸術文化活動に参加する際、活動における楽しさを楽しむのみならず、形成に影響を及ぼす契機に出会うようになる。この場合、契機を与え得る刺激に対する個人の反応は活動以前に持っていた内的基盤によって異なって現れるといえよう。即ち個人がある価値的・機能的体系と関わる際、活動以前に形成されてきた内的性向によって活動に対する親近感あるいは距離感を感じるのである。このような内的性向は活動に対する動機化の程度も反映するが、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) が論じるような、生存の条件のもとで形成され、比較的安定的に維持される心的傾向としてのハビトゥスにあたる可能性もあり得ると考えられる。

成人教育学において典型的ともいわれる成人の内的性向における特性は、未成年期を経て長期にわたる生における出来事と生きた場の社会文化的条件を背景にした安

定的なハビトゥスの集積であるといえよう。このハビトゥスは自分の恒常性と自己防御を保ち続ける傾向をもち、蓄積されてきた情報を疑問視する情報を拒絶する<sup>15)</sup>。このようなハビトゥスの特性から考える際、成人の芸術文化活動の過程に現れる効果的遂行と挫折などは単なる必要性及び動機化の高低のような要因だけではなく、過去経験と関連したハビトゥスの解釈からも照明される必要がある。さらに、ハビトゥスを解釈する立場における文化活動は過去経験の産物として身につけたハビトゥスから自由になり、自発的であれ、強制的であれ、過去の産物として形成されたハビトゥスを再評価し、解体する過程を含意することによって教育的意義を持つことになるといえよう。

教育学におけるハビトゥスは学校が教えるハビトゥスと上流階層の子弟がその出身の社会環境において身につけたハビトゥスとの親和性によって社会的選別において有益さを得るといふ議論としてよく知られている<sup>14)</sup>。ところで、宮島喬はブルデューの貢献をハビトゥスの形成における象徴的支配と実際の支配を区別し、提示した点にあると指摘し、出身環境によるハビトゥスが自動的に社会的有益さを与え得るといふ解釈に対し、異なる見方を提起する<sup>15)</sup>。即ち象徴的支配は学校のような非現実的な世界の中で行なわれる習得であり、実際の支配はどのような状況で何をどのように用いるべきかを全体として学び取る状況内の習得であり、いわば体得と言うべきものである。そのため、この場合、状況のパターンに応じ、変換能力の習得が重要視され、習得された行為のシェーマは意識的・無意識的行為者の営為に基づいて変換可能性や自己制御性を持つ<sup>16)</sup>。

このような体得を通じた状況における習得は個の形成が、環境として所有されたパターン化された文化的資本(によって)より、文化的環境の意味を解釈する主体的認識の影響によって異なって現れ得ることを意味する。宮島はブルデューのハビトゥスによる再生産を“宿命的・決定論的に見ることなく、その循環を部分的にもストップさせるような変動の要素”に目を向け、“独自の適応力を持つ主観的態度性向の媒介も重視”する必要があると解釈する<sup>17)</sup>。そのため、宮島は“所与の文化資本の貧困を補うため、自ら、別種のハビトゥスの強化、発達をはかり、(中略)第二の文化資本へと構成していきこうとするダイナミックスの適応行動”を、“対抗ハビトゥス”と規定し、重視する<sup>18)</sup>。

成人の趣味活動としての文化活動は、社会的有用性に直接はたらく選別及び評価システムを持っておらず、さらに、自由に自己に対する探検と関心を持たせる機会となる。そのため、無意識的に形成されたハビトゥスに意

志を発現できる特徴がある。要するに、既存のハビトゥスを形成してきた社会文化的環境には無かった世界を設置し、覚醒と感動により、既存のハビトゥスを見なおす機会を持ち得るといえよう。その意味で、文化活動は宮島が言う主体的働きによる第二の文化資本が形成される過程として個の形成に寄与する可能性があるといえよう。

宮島のハビトゥスの解釈にも見られるように、ハビトゥスは“所与の社会的な生活条件のなかで、後天的に習得されたもの”として“簡単に修正のきかない慣性、持続性を持つ”が“条件づけられたものである以上、本然的な能力などとは異質なもの”である<sup>194</sup>。そのため、ハビトゥスは変化可能性を排除するのではなく、意識的な新しい経験と意志の発現によって解体と再形成が可能であるといえよう。ハビトゥスの再形成における可能性の探求は成人の成長をより実質的な議論として引き上げるものであると考えられる。

又、追加的にもう一つの文化活動の意義を関係性の回復という視点で言えると思う。成人の文化活動は活動過程における必要不可欠な表現行為によって、他者との関係を形成する。これは北田耕也が「芸術文化活動と感性」を論じるなかで提起したとおり、内面の希求に目覚め、自ら表現者たるべく決意することであり、このような表現の主体の蘇生は真の自己の回復であり、それがあってはじめて他者との人間的つながりが生まれるのを意味する<sup>200</sup>。このような表現活動は情報化社会における演出性、戦術性、仮面性を持つ人間像が日常化されることに対し、覚醒を与えることができると考えられる<sup>201</sup>。活動を通じ、内面的自己を表出し、そのような他者との共同を長く維持していく地域の文化活動集団は、仮想的世界に関わる生活の拡大によって自分及び他者との真面目な関係性を失いつつある現代人の自我像とは対照的であるといえよう。

では、成人が文化活動をすることにより、既存のハビトゥスを解体し、自己及び他者との関係性を改善していく契機を与える活動の内容体系とは何か、その活動が個人とのあいだにおいて創り出す形成の意味は文化活動のどういう属性から生まれるのか。このような視点から、続くⅢ章では、S・K. ランガー (Susanne K. Langer) の議論を通じ、芸術文化活動における内容体系とその意味を検討する。

### Ⅲ 文化活動の内容体系

#### A サインとシンボル

ここでは、現代の美学者であり、同時に哲学者でもあるS・K. ランガーの議論を参考してみる。ランガーは著書『シンボルの哲学』のなかで現代人が事実主義及び

因果関係に対する絶対的信念のため、感情的反応を抑圧することを指摘し、現代人の生き方の様式には人間の心的生活の維持や人生における定位を呼び起こすシンボルに対する理解が減少し、多様なサインに従う生活が主になっていくことを述べる。たとえば、自動車の操縦はその一つ一つがあるサインに対する反応であり、その全過程に含まれた唯一の習慣はサインに従うというものである<sup>221</sup>。

サインに従う生活は機能的に高度に分化され、多様に記号化された機械文明及び情報化社会における生活様式に符合するものとして現代社会に対する適応の側面を浮き彫りにしている。しかし適応すること自体が生きる目的ではないという面で主体の感情や意識の表現とはあまり関係がないサイン中心の生活は人間がより人間化され得る別の異なる性格の生活との調和を必要とするといえよう。ところで、ランガーはこのようなサインと対照的な性格を持つ概念としてシンボルを取り上げ、その意義を明らかにする。

ランガーによると、サインはある対象や状況に対する兆候あるいは報告を意味する。稲妻は雷の聞こえてくることのサインであると同時に、雷は稲妻が光ったサインである。その反面、シンボルは主観を導いてその対象を表象させ、「心に描かせる」。そのため、シンボルはそれらの対象の代理ではなく、対象についての表象を運ぶものである<sup>231</sup>。サインとシンボルの差異は何よりもサインが持つ客観性に比べ、シンボルは対象に対するある主観的イメージを意味し、言葉で表し得なく、弁論的論理で伝達できないものを表現できる独特な論理を持つ表現形式になりうる点である。

このようなシンボルへの着眼は機能的ネットワーク社会における人間のコミュニケーションが主観を表現する機会や技術を喪失することによって内的自我が円滑に機能できない問題に対して示唆を与えると考えられる。しかし主観の表現は社会的に受容される形式を借りない場合や恣意的である場合、むしろ問題を起す場合もあるがシンボルを通じた心情の表出は普遍的形式を持つという点でそのようなものとは異なるといえよう。ランガーの議論に戻って言うと、シンボルによる表現は「普遍性」と「形式」の概念を前提とし、成立する。“われわれの感覚経験、感情及び純粋に個人的な連想”は“個人差があるにもかかわらず”、“或る対象について”“同一の概念が多数の表像として具体化されるの”である。そして“当面の対象を含蓄的に示しうるものは、様々な姿をとっている思考あるいは心像のいずれのなかに現れてくる形式”なのである<sup>231</sup>。

そのため、シンボルの理解及び共感感覚は感覚と件をめぐ

るすべてのものを具体化するある形式をみる能力によることであると言えよう。さらに人間の主観的な心的生活の維持は心象を投影できる形式を学んで他者の表象を理解・共感することによって成立するため、ある程度学習を必要とすると考え。このような学習は鑑賞者のみならずシンボルの創作者になるためにも必要となる。なぜならば、“美的感動”は“芸術的労作の源泉ではなく、その結果”<sup>25)</sup>として過程の中から生まれ、表現形式が創られる過程は様々なサイン体系の処理を必要とするためである。

ランガーは『芸術とは何であるか』という別の著書を通じ、芸術作品は主観的實在の客観的表出を可能にする形式を必要とすることを指摘し、それぞれの芸術における形式を説明する<sup>26)</sup>。即ち、舞踊の場合は、互いに作用し合う力の展開であり、絵画は純粋に空間的積量からできておるが眺めるために創作された虚の積量であり、音楽は楽音が創り出す時間的経過と律動でできていることを意味する<sup>27)</sup>。

ところで、これらの形式は、それぞれの芸術において、人間の内面的生命の本質をイメージ化するとき、利用される普遍的なものであり、その形式の中に主観を表わすための様々なサイン体系を持っている。ランガーはそれぞれのサイン体系まで踏みこんで取り上げてはいないが、主知のとおり、それらは音楽の場合、音の多様な雰囲気を作り出す機能に対する記号体系であり、絵画の場合、空間と色彩における構成技術であり、舞踊の場合、身体が多様な動作における演出能力であるといえよう。これらのサイン体系は、表現形式としての特定のイメージが端的に付与されることとは異なり、客観的知識の蓄積と長い訓練を必要とするものであるといえよう。

そのため、ランガーの議論を参考にする際に、芸術文化活動の内容として次の二点を押さえておくべきであると考え。まず、第一に芸術文化活動が内容体系としてシンボルという表現形式とその表現形式を成立させるサイン体系の双方を持っているという点である。第二に、活動者は、前文化活動の段階を通じ、体験的にこれらの内容体系についての学びの過程をもたなければならないという点である。

## B シンボルの教育的意義

ところで、個人が前文化活動の段階を通じ、内容体系におけるシンボルを理解し、習得することはいかなる有益さがあるのだろうか。ランガーの議論を土台にし、二つの点で検討する。1つ目は、個人の認識の拡大である。ランガーによると、芸術的真理は、“シンボルが持つ迫真性”にある。そのような真理は、命題的な真理と

区別され、特別な帰結を持たなく、“感覚が持つ直観的な組織化機能が対象や空間、色彩や音声に形式を与える”ものである<sup>28)</sup>。そのため、このような非弁論的形式を認識することによって科学の意味論を越え、認識の範囲を拡大することができるのである。

二つ目は、シンボルは個人の主体的存在に影響を与えることができる点である。ランガーはサインとシンボルの関係を人生における實在を作る織物として比喩する。この場合、織物の縦糸は我々が「与件」と呼んでいるものであり、すなわちどんな意識的作用も無しによりどころとするサインであることを指摘する<sup>29)</sup>。反面 よこ糸はシンボル体系として「内的世界」をくみ立て、正と邪の世界、要求と許容の世界において相互の行動を制限させ得るのみでなく、それらを命令でき、相互を制止させる。それによって人間は、“単に一つの場所に住むのみではなく、「空間」の中に住み”、“単に一つの時間に住むのみでなく「歴史」の中に住む”ようになる<sup>30)</sup>。

このようなランガーの議論は、人間がシンボル形成の能力を持ち、人生を意味付けることによってより主体的になりうることを示唆する。それとともに生を通じ、表現したいシンボルを持つことにより、現実そのものが本質的に意味に満ちてくることを意味する。それゆえ、ランガーはシンボルの自由のどのような失敗も我々の人間的自由を廃棄するものであり、このような心的な安住地を持たない生活は、知性と感情の構造を欠き、全面的な無関心と言ってよいものであるといっているのである<sup>31)</sup>。

ところで、ランガーの議論は芸術についての哲学的意味を説いたものであるため、シンボル形成の能力、すなわち、ある表象をそれぞれの表現形式によって自由に創り出す訓練が終わった主体的活動段階にあたる議論であるといえよう。しかし、芸術文化活動に参加する人々は形式を学ぶ過程に関わることによって活動の意味を理解できるため、前文化活動段階におけるシンボルと心的生活の過程には別の意味が含まれるといえよう。

## IV 個の形成における前文化活動段階の意義

ランガーが言うそれぞれの表現形式を通じ、個人が表すものは自分の感情それ自体ではなく、その感情のなかにある普遍的なものである。そしてこの主観性のなかにある特定の普遍性の表現は主体的活動の段階において創作を通じて行なわれる場合が多い。反面、前文化活動の段階においては多様なシンボルが作られるまでの過程を縮小したモデルを体験することが主な活動となっている。さらに他者のシンボルを模倣してやることによってその美的感動を共感し、感性を発達させる段階でもある。そのため、前文化活動の段階におけるシンボルは表現され

るものであるというより、理解される対象として意味づけられるといえよう。

一方、この過程はサイン活用についての学習と訓練の過程でもある。即ち特定のイメージを表す表現形式が物理的な面において特定のサインの適切な遂行と関係していることを理解し、そのサイン体系に対する習得を必要とする過程を意味する。そのため、前文化活動段階におけるサインは生に対して自己を表現していく客観的方法と道具であり、記号と物理的現状における論理的関係を成立させる機能的体系であるといえよう。

ところで、上記のように個人が学びの対象としてシンボルとサイン体系に関わる際、その過程は活動者の内的状態をそのまま投影してくれる場合が多い。主体的活動の段階においては文化活動の機能的体系を手段にし、内的生命の迫真感を表現するが、前文化活動段階においては活動者の形成と関連して別の議論が成立する。

#### A 治療的側面

感情社会学の議論を参考すると、一般に人は感情の生成を意識したときに、自分らしさを感じるといわれる。そして、この感情の生成は、自分がしたいことをしているとき、感じるものとして、制度的目標に到達しようと決意したとき、経験される制度的自己とは異なる衝動的自己を経験することである<sup>32)</sup>。このように自己の願望と符合する感情が形成され、感情を受容する場合、自己らしさを経験できる。しかし、心的生活における課題となるものはその反対の場合、即ち自己の願望とは関係無い不適切な感情が生じてその感情を処理しなければならない状況を意味するであろう。感情が問題になる場合は、一般にこのようなネガティブなものであるといえよう。

個人が自己の中にコントロールできない不適切な感情を感じる時、一般にはそれを解消するためにいろいろな方法を使用する。しかし、そのような感情に対する適切な診断が無く、臨時的に感情を処理する場合、同じ感情の繰り返しを避けられなくなる。しかし、カウンセリングにおいて来談者が長期にわたり、相談を受けることにも見られるように、感情に対する知的理解が感情の問題をすぐ解決できると言えない点もある。そのため、感情の処理は知的理解あるいは臨時的回避に頼るより、不適切な感情から適切な感情の持ち主となる技術を習得し、行なう練習が必要であるといえよう。

ある内容体系を持つ活動を通じた感情の表出は、活動の内容体系が感情中立的なものであるため、活動において感情が反映される形態を残す。個人はその過程においてあらわれた自己と活動との相互作用の吟味を通じ、心情を客観的に把握できる。これを治療的意味と規定して

みる。

治療的意味において、文化活動はまず解放の側面において検討できる。たとえば、希求する感情であるが、失われている場合、求める感情に似ている表現形式に出会うことにより、ある程度、希求する感情を回復できる。さらに内的な抑圧を与えるネガティブな感情に対してその感情とは異なるイメージの表現形式をよく鑑賞することにより、ネガティブな感情を疎外させ、本来の自分の感情を解放することができる。そのほかに、形成された感情を自由に表現する対象が無い場合においてさえ、文化活動の機能的体系は感情の表現を受け入れてくれることにより、活動者にカタルシスを与えることができる。

治療の側面としてもう一つ提起できることは、碓井も指摘したように歪められた心情あるいは未形成された自己との意識的な出会いが文化活動において可能となる点である。ここで指摘する治療的意味は、上記したように、活動体系に同和することによって内的自我が自然に解放される場合の癒しとは異なるといえよう。すなわち、活動の世界が与える癒しの過程に受動的に同和するものではなく、活動との相互作用において現れる自己の内面の様相を意識的に対象化し、吟味する過程である。このような事例は、活動に対する望みはあるが、不適切な感情のため、活動への関わりにおけるバリアを感じる場合によく見られる。

たとえば、ピアノを弾く場合、苦しみの中で喜びの曲想をピアノに対する物理的な働きによってだけ、表現することは不可能である。そのため、活動体系は活動に臨む人が持つ内的バリアを告知することにより、その治療の契機を与えるといえよう。活動に対してその治療的機能を期待する理由は、様々な要求や戦略が混在している対人的関係においては内的問題の真実なありさまが変質する可能性があるためである。そのため、ありのままの内的状態を実体化し、吟味する機会として前文化活動との出会いは意味深いといえよう。

ところで、活動において個人が未経験の体系と関わる際、その体系の秩序を消化させ得る形成が必要とされる。上記の不適切な感情による抑圧がある場合、活動の遂行に抵抗が生じるように、活動との相互作用ができる機能的・人間的能力が活動者において形成されていない場合も活動に対する抵抗が発生できる。活動が持つ機能的体系はこのような不適応と未形成の部分で反映する。そしてこの場合の不適応と未形成は何よりも活動の機能的体系を構成するサイン体系を処理する訓練過程の不在から起因するといえよう。そのため、実生活に必要な不可欠ではないが人々が様々な文化活動にかかわることは、その活動過程を通じ、人間として多様な能力の分化と深化が



自己のなかで現れてくることを経験するためであろう。

## B 形成的側面

文化活動の体系は、活動者に内的状態を告知し、不適応及び未形成の部分を知覚させることにより、意志の発現を呼び起こす契機となる。前文化活動段階の意義として提起した上記の治療的意味はこのような意志の形成を通して、完成されるといえよう。

特定の文化活動の体系を体験的学習によって遂行していくことはそのような文化にふさわしい自己を形成していく過程と並立する。この過程において、活動者は美的感動に出会うようになり、そのような感動を自分の生活において持続させるためにバリアを克服し、意志的行為の過程を持つ。このような過程は、フランスの哲学者、ポール・リクール (Paul Ricoeur) が提起した意志作用の連続として、決意し、決意を行為によって実在的なものに刻む意志的運動を行ない、意志する方向を持つ必然性に同意するという過程の循環を表す<sup>33)</sup>。

又、文化活動の遂行において“非意志的なものと意志的なものとの相関関係”、即ち“欲求や情動、習慣等々が完全な意味を持つことは、意志と結びついて”であることを体験できる<sup>34)</sup>。活動への関わりにバリアを与える内的動機を“拒絶し、拒絶された諸動機から距離を取る”<sup>35)</sup>ような意識的克服無しでは活動の持続が難しくなるためである。このような意志過程が思考に留まらず、実現できることは、文化活動は連続的体験によって行なわれ、その体験は多少程度の差異があるが絶えず改善を要求する訓練の過程の上にあるからである。そして訓練によって形成されつつある意志は、主体的文化活動段階に至り、表現の主体として活動するとき、シンボルの形成の低力になりうる。なぜならば、シンボルは実現しようとする意志の上で、より迫真感とエネルギーを表出するイメージとして現れるためである。

ランガーが言うシンボルの表現は自分に対し、他者に対し、社会に対し、普遍的価値を呼びかけるメッセージである。このシンボルは、単なる内的状態に対するサインではなく、精神世界の志向性を表現することであり、人間的意義を主張するものとして、意志の表現でもある。そしてシンボルを表象し、他者のシンボルに同意することはある程度、意志の共感を意味するものであるため、社会教育における主な議論の主題となる社会的意義も含むといえよう。

ところで、個人生活のレベルで志向性を持つ文化を作り上げる意志力はⅡ章の対抗的ハビトゥスと第二の文化資本の形成にも見られたように、主体的働きを持って始まる。そしてその主体的働きへの意志は機能的体系と価

值的体系、あるいはサインとシンボルを同時に備えている文化活動の内容体系を通じ、持続的に鍛えられ得るといえよう。

社会的有用性や業績のためのものでもなく、いつでも撤回できるものであるのに、個人が持続的に文化活動に参加する意味は様々に存在するであろう。これを人間形成の観点で捉えると、学びと体験と訓練の中で発達した意志作用の円滑化を通じ、平易な心情で、内的あるいは外的生活にかかわってくる諸現状に対し、シンボルを形成し、実践する意志の練磨への寄与であるということになる。これが本稿の結論である。

## おわりに

文化活動に対する既存の研究がどちらかというところ、文化の社会的意義に焦点を当ててきたのに対し、本稿ではそれを支える基盤としての個人を重視し、個の形成に働く部分を意志形成の側面から提起した。その際、S・K・ランガーの議論を手がかりにし、文化活動の内容体系が持つ教育的意義を明らかにすることができたと思われる。今後の課題としては、文化活動の小集団における個の形成と共同の意味を芸術療法についての先行研究を土台にし、考察することが必要である。紙幅の関係で次ぎの論考の課題にする。

- 1) 総理府『生涯学習に関する世論調査』1999, p.5-6
- 2) 碓井正久“社会教育の内容と方法”<小川利夫・倉内史朗編『社会教育講義』, 明治図書出版社, 1981> p. 114.
- 3) 宮坂広作“社会教育実践の現代的課題”<日本社会教育編, 『社会教育の現代化—大学と社会教育—』, 日本の社会教育第11集, 東洋館出版社, 1963> p.62-64.
- 4) 佐藤一子『文化協同の時代』, 青木書店, 1989, p.50
- 5) *Ibid.*, p. 51-60.
- 6) 北田耕也『大衆文化を超えて』, 国土社, 1986, p.10
- 7) 山崎功“芸術, 文化活動と主体形成” 北田耕也, 朝田泰編『地域文化の創造』, 国土社, 1990, p.39
- 8) 北田耕也“人の人らしさへの共感と加担”<北田耕也, 朝田泰編『地域文化の創造』, 国土社, 1990>p.13-14.
- 9) 柳父立一“時間主体性と週休二日制—「道楽としての社会教育」試論”<日本社会教育学会編, 『週休二日制・学校週五日制と社会教育』, 日本の社会教育第37集, 東洋館出版社, 1993> p.79.
- 10) *Ibid.*, p. 78-79.
- 11) 品川清治“芸術行動”<作田啓一他『文化と行動』 培風館, 1963> p.147-148.

- 12) *Ibid.*, p. 149.
- 13) Pierre Bourdieu 『実践感覚1』 [Le sens pratique : Les Edition de Minuit, Paris, 1980] 今村仁司他訳, みすず書房, 1988. p.97-98.
- 14) 宮島喬 “文化による支配, 文化による選別” <見田宗介・宮島喬編『文化と現代社会』, 東京大学出版会, 1987> p. 24.
- 15) 宮島喬 『文化的再生産の社会学』 藤原書店, 1994. p. 164
- 16) *Ibid.*, p. 165-166
- 17) *Ibid.*, p. 167-168
- 18) *Ibid.*, p. 163
- 19) 宮島喬 “文化による支配, 文化による選別”, *op.cit.*, p. 19.
- 20) 北田耕也 『自己という課題』, 学文社, 1999. p. 118-121.
- 21) 加藤晴明 “メディア文化と情報接触” <橋本和孝, 大澤善信編『現代社会文化論』, 東信堂, 1997> p. 48-57.
- 22) Susanne K. Langer. 『シンボルの哲学』 [Philosophy in a new key : Harvard university press, 1957] 矢野萬理他訳, 岩波書店, 1960. p. 340-350.
- 23) *Ibid.*, p. 67-72.
- 24) *Ibid.*, p. 85.
- 25) *Ibid.*, p. 322.
- 26) Susanne. K. Langer. 『芸術とは何か』 [Problems of Art : Charles Scribner's sons, London, 1957] 池上保太訳, 岩波文庫, 1967. p. 10.
- 27) *Ibid.*, p. 12.
- 28) Susanne. K. Langer 『シンボルの哲学』 *op.cit.*, p. 326-327.
- 29) *Ibid.*, p. 349.
- 30) *Ibid.*, p. 357-358.
- 31) *Ibid.*, p. 361-362.
- 32) 山田昌弘 “感情による社会的コントロール—感情という権力” <岡原正幸他『感情の社会学』, 世界思想社, 1997> p. 72.
- 33) Paul Ricoeul. 『意志的なものと非意志的なもの』 [Le volontaire et L'involontaire : Aubier, Editions Montaigne, 1950] 滝浦静雄他訳, 紀伊国屋書店, 1993, p. 14-15.
- 34) *Ibid.*, p. 10.
- 35) *Ibid.*, p. 33.